

「文学」のグローバリズム

—日本からみたモンゴル文学—

芝 山 豊

Globalization and Literature in Mongolia

Yutaka Shibayama

目次

はじめに

- 1 ゴーリキーの手紙
- 2 「文学」を表すことば
- 3 三人称人称代名詞

おわりに

はじめに

かつて、「文学」とは「近代」の新しい概念であった。モンゴルに限らず、日本や中国においても、いやおうなく「近代」に引きずり込まれた非西洋の「近代」の「文学」は、西洋の普遍性にもとづくものとして構想され、それぞれの言語の中に新たに創出されたものである。そのそれぞれの「文学」は、その西洋の普遍性に対して、自らのアイデンティティーを主張しようと格闘を続けてきた。その悪戦苦闘の百年を経て、アジアの「文学」は新たな局面を迎えている。

『世界』2001年1月号、イルメラ・日地谷＝キルシュネライト「村上春樹をめぐる冒険」はドイツで起こった村上春樹の評価をめぐる問題から、作家の重訳容認の態度を考

察して、村上春樹を英語へのヘゲモニーを内在化させる作家として断罪し、次のように結んでいる。

「ゲーテの言うところの“世界文学”とはお互い大きく異なっていながらも、それぞれが質の高い個性を主張し合う文学を意味しており、いわゆるグローバル化とは似ても似つかぬものなのである。“国内”と“国外”向けの作品の存在は、地域文化の閉鎖性や田舎根性を再び強めてしまうという逆説的結果を生みかねない⁽¹⁾。」

問題にされているのは、国際商品としての村上作品である。いま日本文学は世界市場の問題とリンクして語られる存在なのだ。村上作品がマクドナルドのハンバーガーに喩えられることは、それほど奇異なことではない。何故なら、書籍出版こそが初期の資本主義的企業として「インターナショナル」を生み出してきたものに他ならないからである⁽²⁾。

「だから僕はこれまで僕なりに、母国語たる日本語を頭の中でいったん擬似外国語化して——つまり自己意識内における言語の生来的日常性を回避して——文章を構築し、それを使って小説を書こうと努めてきたのではないかと思う⁽³⁾。」

この村上自身の発言からも「ジハード対マックワールド」の二項対立の観点のみから言えば、彼がマックワールド側に身をおいていることは自明のように見える。

しかし、グローバリゼーションとは本当に「地域文化の閉鎖性や田舎根性」を取り払うありがたいものなのだろうか。文学におけるグローバル化とは何を意味するのだろうか。

小論では西洋文学と中国文学との関係においてのみ専ら論じられてきた「国文学」の視座の横にモンゴルの文学をおくことで、グローバル化と「文学」の関係を探ってみたい。

1 ゴーリキーの手紙

「文学を「客観的」記述が可能なカテゴリーとみるのはよろしくないとしても、では、人々が気まぐれに文学と呼ぶもの全部を文学と呼べばよいかという、そうでもない。その種の価値判断に気まぐれなところなど毛頭ないからだ。価値判断の根は信念の深層構造の中にあり、その信念たるや、揺るがざることエンパイア・ステート・ビルディングのごとしといった趣きを呈している。そこでこれまで明らかにしたことをまとめてお

けばこうなるだろう。文学は、昆虫が存在しているように客観的に存在するものではないのはもちろんのこと、文学を構成している価値判断は歴史的变化を受けるものである。そして、さらに重要なことは、こうした価値判断は社会的イデオロギーと密接に関係しているということだ。イデオロギーとは単なる個人的嗜好のことを指すのではなく、ある特定の社会集団が他の社会集団に権力を行使し権力を維持していくのに役に立つもろもろの前提事項のことを指す⁽⁴⁾。」

T. イーグルトンがこう言いきるとき、彼の頭に浮かんでいるのは、英語で書かれた文学作品とその批評であり、せいぜいフランス語や、ドイツ語、そしてロシア語、中南米を含むスペイン語ぐらいが視野に入っているに過ぎない。その意味で、彼の〈マルクス主義的、反ヒューマニズム的「テキストの科学」〉としての文学研究はヨーロッパの文学研究の正統性を継承しているといつてよいだろう。

この正統性を、1925年（昭和元年）5月にマクシム・ゴーリキーがモンゴルのエルデニ・バトゥハンへ宛てた有名な書簡に見出すことができる。

この書簡はモンゴル人やモンゴル研究家なら誰でも知っているものだが、一般に知られているとは言いがたい。敢えて全文を引用しておく（下線は引用者）。

尊敬するデルデネ・バトゥハン。

たいへん興味ぶかいお手紙をいただき、心からお礼を申します。モンゴルのインテリゲンツィヤが自分の前に据えている課題が、どれほど重大かつ困難であるか、たいへん明快に、あなたは私に理解させてくれました。あなたの同志たちに、衷心より気力の充実を希望させてください。あなたがたが壮大な、そして必要不可欠の事業を始めたのだという固い信念は、あなたがたの生涯をつうじて揺らぐことがないでしょう。あなたがたモンゴルのインテリゲンツィヤによって雄々しく始められた仕事にまさるほど、重大かつ困難な仕事は地上には他にありません。

あなたは、「われわれの力は不十分です」と書いておられます。このことがあなたがたを困らせることはないはずです。大事なことは力の量ではなく質です。あなたは、もちろん、ご存知でしょうが、幾百万の鈍重なロシア農民を新しい生活に向かわせているのは、数十人の決定的な人びとの力によるものです。

あなたは質問なさるのですね——ロシアの芸術文学をモンゴル語に翻訳するさい、

どのような原則をもつべきか？

この質問にたいして、あなたにご満足がいくように正確なかたちでは、とうてい、わたしには答えられませんまい。しかし、私が読んだモンゴルに関する書物によってモンゴル人を判断するかぎりでは、貴国の人民に能動性の原則を伝道することが最も有益であろうかと考えられます。ヨーロッパは、ほかならない能動的な生活態度にすべてを負っていますし、ヨーロッパではすべての人種による成果がみごとに、十分に、摂取消化されているのです。

「願望は苦悩の源泉である」と仏陀は教えました。ヨーロッパが科学、芸術、技術の領域で世界の他の諸民族の先頭をきって進んだのは、けっして苦悩することを恐れず、現に所有しているものより良いものを望んできたからです。ヨーロッパは自国の人民大衆のなかに正義への、自由への希求をよびさますことができました。この一事のことで、われわれはヨーロッパの数かずの悪業と罪惡を許してやらなくてはなりません。

モンゴル人民にヨーロッパの精神とその大衆の現代の願望を紹介するのでしたら、あなたがたはほかでもなく、能動性の原則、つまり、無為の自由でなく行動的な自由へ向かう緊張した思考がもっとも鮮明に表現されているヨーロッパの書物を翻訳すべきだ、と思われるのです。

私の考えでは、パスカル、ファラデイのような科学者と同様、フランクリン、ガルバルジーその他のような人びとの伝記が有益でしょう。こういう伝記は芸術作品に劣らず教育的に重要です。後者のうちから、正義と解放の理念の規範となる人間のヒロイズムがもっとも明確に示しだされているものを選ぶ必要があります。

この関係でもっとも特徴的な書物をいまずぐ挙げることはむづかしいですが、お望みとあれば、すこし考えてみて、そういう本のリストをあなたのために作成しましょう。

いまのところは、とりあえずお返事まで。もう一度、あなたおよびあなたの友人たちの気力の充実を、自己への信頼を希望します⁽⁵⁾。

長年にわたって、この書簡はモンゴル近代文学のスタートを宣言する打ち上げ花火の役割を担ってきた。モンゴル人民共和国時代の文学史のたてまえとしてだけでなく、モンゴルの文学者たちは近代文学の起源をこの助言に求めた⁽⁶⁾。

日本のモンゴリストたち、例えば田中克彦のような碩学も例外ではない。

「モンゴルの文学が、みずからを「世界文学」の影響下に置き、その一員たらしめる願望は、国民教育の課題と不可分にむすびついていた。言うまでもなく、革命は政治権力の奪取によって終わるものではなく、特にモンゴルにおいては、かつてこの民族の経験したことのない、巨大な教育運動の性格を帯びていた。以下にのべようとする、革命政府の文部大臣であったエルデニ・バトハーンとゴーリキーの間に交わされた往復書簡は、当時のこうした雰囲気をも今日に伝えるひとつの記念碑であると言える⁽⁷⁾。」

ここでいう「世界文学」がゲーテ的な意味なのか、ヨーロッパ中心の文学という曖昧語法によるものなのかは判然としないが、シャニフスキーが言ったように「社会主義リアリズムは社会主義古典主義にすぎない」ことが誰の目にも明らかになった後でも、ゴーリキーの忠告が疑われることはあまりなかった。その証拠を「民主化」後、新生モンゴル作家同盟が編集を続けている膨大な文学叢書『モンゴル文学の精華』に収められた書簡集にみることができる⁽⁸⁾。

しかし、インド人ロシア文学研究者 カルパナ・サーヘニーは『ロシアのオリエンタリズム』の中でこの書簡に全く異なる評価を与えている。

「ロシア文学の第一人者で多くの貧困なロシア人作家の救世主とされるゴーリキーに、非ロシア人に対するまったく異なったアプローチは期待できなかった。ゴーリキーは単にマルクス主義の史的・弁証法的唯物論の教義にしたがっていただけであり、植民地諸民族の文化と心理に関するかつての東洋蔑視（オリエンタリズム）の仮説を同じように共有していたのだ。」と彼女は指摘し、前掲の書簡の一部を引用して続ける。

「ゴーリキー自身も、行動的なヨーロッパと受動的な東洋（オリエン）という二項対立を受け入れているわけである⁽⁹⁾。」

ゴーリキーの主観的な意図はともかく、この書簡には、サイドの定義によるオリエンタリズムが反映されており、いまだかつて、プーシキンをもつことがなかった諸民族に対して、ヨーロッパモデルの「文学」を強制するという意味において、機能してきたと彼女は主張するのである。

サーヘニーのこの指摘は極めて重要である。しかし、同時に、モンゴルの歴史的コンテキストが旧ソビエト版図の中央ユーラシアの諸民族、あるいはエスニック・グループとは異なっていることも忘れてはならない。キルギスのチンギス・アイトマートフやバシキールのムスタイ・カリムのようなロシア語の読者を相手に書いて売れる作家をモン

ゴルは輩出しなかった⁽¹⁰⁾。モンゴルは、辛うじて政治的な独立を守り、独自の言語による「文学」を成立させてきたのである。モンゴル文学を一種の植民地文学という枠組みの中に閉じ込めて議論することはできない。また、同時に、モンゴル文学は、インドやカリブの文学のようなポスト・コロニアルの文学が行ってきた西洋の正統性への鋭い異議申立てを行えないまま、ナショナリズムの袋小路をさまよっているように見える。

その理由を知る手がかりは、次節で見るモンゴルの近代西洋的「文学」受容と形成の過程で定着した「文学」の訳語に隠されている。

2 「文学」を表す言葉

「早春賦」という歌の名前は誰でも知っている。賦とは何か。賦は六義のひとつである。六義とは、『詩経』の分類法で、内容別の分類である風・雅・頌と、形式上の分類である賦・比・興の六つをいう。中国では六義が全く忘れさられているわけではない。林語堂は西洋人に向かって中国文学を説明するとき、興という概念を用いている。日本の場合、一時は和歌においても適応されることもあったものの、「文学」の用語としてこれを用いることはない。

モンゴルはどうだろうか。

風 ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ 雅 ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ 頌 ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ 比 ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ 興 ᠮᠠᠨᠤ ᠮᠠᠨᠤ 賦 ᠮᠠᠨᠤ

『蒙文分類辞典』によってこれら六義の訳語を簡単に探し出すことができる。手元のもの、1978年発行の1956年版の再版だが、オリジナル版は1926年に北京で発行されている⁽¹¹⁾。六義の訳語は14世紀に編まれた『華夷訳語』には見えないが、18世紀後半に成った『五體清文鑑』に収められたものと一致している⁽¹²⁾。つまり、大モンゴル時代にはなかったが、清朝においては、文化語彙として、これらの言葉がモンゴル語で表現される必然性があったということである。

モンゴル文学において、いまなお主要な部分が韻文に占められていることを思えば、韻律に関する漢語からの訳語がなにがしかの役割を果たしていると思われるかもしれないが、中国語と言語の音韻構造と統語構造の大きく違うモンゴル語において、マクタールのような口承文芸のジャンルを表す本来のモンゴル語の用語を除いて、漢語の訳語がモンゴルの文芸用語として用いられることはなかった。

モンゴルの韻文が漢語の文芸用語で説明されることがなかったという事実同様、ある

いはそれ以上に重大なことは、日本人や中国人が母語の詩を説明するのに、イアムボス・トリメトロスといったギリシャ起源の術語を決して用いないのに、モンゴルの韻律の説明には、ロシア語経由でこのアリストテレス以来の韻脚を示す術語が専ら用いられてきたことであろう⁽¹³⁾。

支配文化が文学に与えた影響という点からすれば、前近代と近代のそれは比較にならないほど大きい。

とはいえ、このことをもって、モンゴルの文学はソビエト・ロシアによる植民地文学であると言い切れるわけではない。そのことを他ならぬ「文学」ということばから見てみたい。

まず、興味深いのは、六義のようなモンゴルには直接適応されない数々の文芸用語を登録している『蒙古語分類辞典』に、肝腎の「文学」という見だし語が存在しないことである。もっとも、漢語における「文学」が一般に今日の「文学」の意味で用いられるのは、1917年の「文学革命」以後であるから、それから10年以内に北京で作られた辞書に「文学」という語彙が含まれていないのは無理もないかも知れないが、「文学革命」よりずっと後に編纂された辞書にも「文学」という語彙を見出すのは難しいのである。例えば、1933年、陸軍省出版の『蒙古語大辞書』和蒙の部には、小説や小説家という単語が見だし語として登場しているにもかかわらず、「文学」という見だし語は存在しないのである⁽¹⁴⁾。1930年前半までは近代西洋の「文学」概念を移す訳語は確定していなかったと見てよいだろう。

今日では、モンゴル語には「文学」に対応するふたつの語がある。

すなわち、**уран зохиол**と**утга зохиол**である。

1980年代後半に出版された蒙露英辞典はこの2語を以下のように定義する⁽¹⁵⁾。

уран зохиол художественное произведение, художественная литература

belles-letters

утга зохиол лигэратура literature

つまり、**literature** は、**утга зохиол**で **belles-letters** は、**уран зохиол**というわけである。ロシア語の訳語でもわかる通り、ここの **belles-letters** は **saintes-letters** と対立するものでも、軽い随筆風読み物、あるいは軽蔑的な文学趣味のことでもない。美文学や純文学と概念されるものとも異なる。モンゴル語での **literature** と **belles-**

letters の違いの吟味は少しあとで述べることにしたい。

1960年代末の英蒙簡約辞典では、literature に対して *утга зохиол* のみをあげている⁽¹⁶⁾。1982年発行の大部の露蒙辞典では、литература の項に、*утга зохиол, зохиол; художественная литература уран зохиол теория литературы утга зохиолын онол* をあげ、*бэллэтура* に *уран зохиол* をあげているし⁽¹⁷⁾、それがでる前に広く使われていた1960年版の露蒙辞典も同様である⁽¹⁸⁾。そして、1957年の蒙露辞典にも *Уран зохиол художественное произведение, художественная литература; беллетристика* となっている⁽¹⁹⁾。

以上から、遅くとも1957年頃、これらの訳語の対応関係が確立していたと見てよいだろう。そして、1950年代はじめまでの語彙を内モンゴル出身のインフォーマントを中心に編纂したキリスト教布教のための実用蒙英辞典にも文学の訳語が見えないことを考えあわせると、これらの語がモンゴル全体のなかで一般に今日の「文学」の意味で定着してくるのは、1950年代後半とみてもよいだろう⁽²⁰⁾。

一方、1975年内モンゴル出版の蒙漢词典には *уран зохиол* を文学、文学作品として、文学革命にもこの語を用いており、*утга зохиол* の項目には、単に *зохиол* と同じとしており、二つの語の使いわけを明確にしていない⁽²¹⁾。

1973年発行のブリヤート・ロシア語辞典には、*уран зохоёл художественное произведение, художественная литература, беллетристика* となっており、これはモンゴル語の定義と対応している。しかし、*утга* に対応する *удха* に続く *зохоёл* の見だし語はなく、そのかわりに、*литература уран найханай литэратура художественная литература* が登録されている⁽²²⁾。

1977年版のカルムイク・ロシア語辞典にも *утга зохиол* は存在しないが、*литература* は見だし語に登場する⁽²³⁾。

広義のモンゴル語、モンゴル語族に属する、ブリヤート語やカルムイク語が、他の旧ソ連の諸民族、例えば、ナナイ語などと同様に、*литература* (つまり、ロシア語が「近代」とともに輸入した literature) を「文学」として、そのまま見だし語としていることと、モンゴル語が *литература* を辞書に登録していないことの意味はきわめて重要である⁽²⁴⁾。

つまり、モンゴルには、literature とは別の「文学」があり、それらを区別する必要が

あったことを意味している。つまり、belles-letters は 近代西洋の literature と等価ではない文学の総体を意味しているのである。

モンゴル人民共和国において、1930年代の半ばから、**утга зохиол**と**уран зохиол**という二つの用語は明確な差異をもって用いられていた。少なくとも、モンゴル人民共和国最初の文学理論家C.ボヤンネメフ（1902—1937）は、二つの語を区別して用いている。

ボヤンネメフの文学理論については、赤石洋通の先駆的な研究「ボヤンネメフ——嵐のなかの帆船」があるが、残念ながら、その中で**утга зохиол** **уран зохиол**二種類の用語は峻別されていない⁽²⁵⁾。赤石論文では、〈**Шинэ үеийн уран зохиол**〉(『新時代の文学』)の冒頭に現れる**уран зохиол**を創作という意味に解して、この「創作」は文学に置き換え可能だとしているが、ボヤンネメフは、一般に著作の中には二種類があり、ひとつは、**бичигийн зохиол** であり、もうひとつが、**уран зохиол** であり、それらはひとしく**утга зохиол**に含まれていると述べており、**утга зохиол** は、あきらかに、**уран** を包含し得る概念ととらえられている⁽²⁶⁾。また、**уран зохиол**に含まれているのは、**үлгэр тууж холбоо шүлэг**（小説と詩）であると定義していること、また、**үлгэр тууж холбоо шүлэг**（近代文学）**хувьсгал уран зохиол**（革命文学）という見だしからみても、**утга зохиол**により抽象的な価値のある広義の文学、**уран зохиол**に具体的な諸作品を念頭においていたことが分かる。

同じ時期1935年に書かれた〈**Утга зохиолын үүд**〉(『文学入門』)では、記録文学として名高いダムバドルジの『トルボノール』を**тууж**としているから、**уран зохиол**を想像力による作品のみに限定するということを考えていなかったはずである⁽²⁷⁾。なにより、芸術作品をいかに生み出すかの実際的な知識を伝授しようとした『文学入門』の題名が**уран зохиол**でなくて、**утга зохиол**になっているのは、**уран зохиол**なら、モンゴルに前近代にも存在したものであり、**утга зохиол**こそ作り出すべき新しい概念であったことを示している。

技艺の巧みさを示す**уран**は長い歴史をもつモンゴル語固有の語彙である。漢語系の辞書だけでなく、**Rasûlid Hexaglot**として知られる14世紀のアラビア語、ペルシア語、トルコ語、ギリシャ語、アルメニア語、モンゴル語、六言語対照の辞典にも、雄弁をあらわす **kelen uran** が登録されている⁽²⁸⁾。モンゴル語固有の言語芸術**уран зохиол**を普遍的な**утга зохиол**としての価値をもった**шинэ үеийн уран зохиол** = 「近代（新時代）」の

「文学」にしなければならないというのが、ボヤンネメフの立場であったと言えるだろう。

この新しい「文学」概念を literature の直接的借用ですませられなかったことの裏に、日本や中国の影響があったかどうかについては、いまのところ十分な資料はない。

しかし、*утга зохиол* が、日本語にしろ、中国語にしろ、漢字の文学から来た訳語であった可能性は強い。『五體清文鑑』に、文学の見だし語はないがその分類の中に、文学部は、*утга* *ᠤᠲᠦᠭ᠎ᠠ* と *сурлага* *ᠰᠤᠷᠯᠠᠭ᠎ᠠ* の組み合わせで表記されている。この古典的な意味の文学に対する訳語は内モンゴルでは長らく使われていた⁽²⁹⁾。モンゴル文学の理論をつくりあげたボヤンネメフが漢化されたモンゴル地域で教育を受けた事実を思いおこせば、日本経由の漢字の影響も大いにあり得るはなしではないだろうか。さらに、ボヤンネメフが、*бичгийн зохиол ба уран зохиол* で始めていることを見れば少なくとも漢語の文学を念頭において用語を考え、選定した可能性は高い。

утга の古典的な意味は、「書の義」ということである。そして、現在の文芸用語解説では、*утга* はイデーであると説明されている。つまり、広義の literature のうち、19世紀から独自の意味をもちはじめた西洋の「文学」の近代性と普遍性を示す部分こそが *утга зохиол* にこめられたものだったのである。

1993年に出版されたД.ガルバートルの文芸用語辞典では、*утга зохиол* の説明にのみ、広義と狭義の意味があり、広義には、人文学一般をさすと説明し、狭義には *уран зохиол* と同じ意味であると説明している。*уран* をラテン語 *littera* と説明し、文字の意味であると説明をはじめ、アリストテレス、プラトン、ヘーゲル、マルクス、エンゲルス、レーニンの名前をあげて説き起こし、ベリンスキーの定義をあげている⁽³⁰⁾。

一方、1989年に出た『文学理論入門』の中で、Ш. ガーダムバ(1924—1993)は同じアリストテレスから始まる説明を *утга зохиол* において行っており、彼は二つの語をボヤンネメフに近い区別でつかっている⁽³¹⁾。

このことは、1924年生まれのガーダムバと1956年生まれのガルバートルの間、一世代に、訳語の受け取り方に大きな変化が生じていたことを証拠だてている。今日、ふたつの「文学」は再び literature に収斂されてしまい、苦勞して作られたふたつの訳語の意味を弁別できなくなってしまうのである。

日本における「文学」という訳語の成立の事情はどうだっただろう。

西周『百学連環』や福沢諭吉『西洋事情』あたりから説き起こされる「文学」という訳語が、現在一般に用いられる「文学」の意味で日本で最初に用いられた例は、福地桜痴の「日本文学の不振を嘆ず」であるらしいが、広く一般に「文学」の概念が問題にされることになったのは、明治20年代頃からのこととしてもよいであろう。文学極衰論争、『浮城物語』論争などいくつかの文学論争と、三上参次、高津鉄三郎『日本文学史』などの一連の「日本文学史」登場のころである。この時代にナショナル・リテラチャーとルビをふった国文学の概念が登場してくるのである。日本のナショナリズムの高揚を背景に、「文学」は、学術一般としてではなく、「邦国人民の盛衰興亡につながることの至大なるを見る」ものとなっていく。北村透谷の用語を使えば、「国民の元気」とつながるものとして観念されることになる。日本でいまのような「文学」の概念ができあがるのは、明治19年の「凡そ形あれば意あり」に始まる『小説総論』のリアリズム論から、1904年、日露戦争のころ、大学制度の中で「文学」が定位されるまでの時期、おそそ20年くらいのことであるといつてよいだろう⁽³²⁾。それは、当然、日本語で19世紀西洋モデルの「文学」を作りあげていく過程と重なっている。この間、広義と狭義の文学の微妙なズレがさまざまな言葉や概念となって生成消滅を繰り返した。それは、literatureを本来、「文章博学」の意味であった漢語の「文学」の中に広義にも狭義にも閉じ込めようとする努力であったが、それぞれの意味範疇を示す円はぴったりと重なりあうことはなかった。それでも、西洋の文学、中国の文学、日本の文学の総称としての「文学」は極めて重宝な言葉であったため、中国もこれを逆輸入するに至ったのである⁽³³⁾。literatureと「文学」は一对一の対応関係の中で、完全に等価なものと認識されていくのである。

北村透谷がテーヌの文学史を賞賛した頃、社会進化論がどれほど強く人々のところをとらえていたか、20世紀の数々の失敗を見てきた今日の我々には見えにくくなっている。19世紀末から20世紀初頭にかけて誰もが「進歩」を信じていた。そして、その進歩は市民社会のそれであった。まがりなりに市民社会を形成していた日本と違って、モンゴルには、一部エリートのサロンを除いて市民社会は存在していなかったのである。そこでは、二種類の「文学」が考えられなければならなかった。ひとつは遊牧民の守りそだててきた言語芸術の総称であり、もうひとつはモンゴルにつくりあげるべき「近代」的な価値としての普遍的な「文学」であった。

1950年代の初め、吉川幸次郎は、既に中国の「文学」の中心が小説であると語ってい

る⁽³⁴⁾。しかし、モンゴルでは20世紀が終わった今日も、「文学」の主人公は詩なのである。多くの民族の中で「文学」が literature やロシア語の *литература* 主流となっていくなかで、モンゴルは二つの「文学」をもち続けた。しかし、今日、ガルバートルの例に見られる通り、二種類の「文学」はひとつのものとして理解されはじめている。モンゴル文学においても、ローカルな「文学」がグローバルな「文学」へと移行していく過程を認めないわけにはいかないのである⁽³⁵⁾。

3 三人称人称代名詞

「三人称は社会と作者との間の明瞭な契約のしるしである。しかし、それはまた作者にとって、自分が欲する流儀で世界を立たせる第一の手段なのだ。したがって、三人称は創造を歴史や実存にむすびつける人間的行為にほかならぬ、文学的経験以上のものである⁽³⁶⁾。」

バルトが語る文学のエクリチュールは日本の近代文学の成立過程において忠実に守られてきた。西洋小説の翻訳が日本語に本来存在していなかった三人称の人称代名詞を産んだことについては、柳父章が詳しく論じている。では、モンゴル語の場合どうだろうか。以下にひとつの例を見てみる。短編小説の一部分の英語訳、日本語訳と原文である。

英訳

Seventeen years old. Green as grass. I am already considered myself a man, but I was made to pay dearly for that delusion.

One July day, I set out with Chingis Khan and his wife for a county fair. Chingis Khan was planning to take part in the horse races. We started out early so as to cover the greater part of distance the midday heat.

Chingis Khan was a nickname I had given to Tsamba, but I never mentioned it to anybody⁽³⁷⁾.

日本語訳

なんという経験だったろう！あれはわたしが17歳の時のことだった。まったく無知な若者だった。当時、私は自分がもう立派な大人だと固く信じていたのだった。だが、あの夏の出来事は、わたしがまだ無能な若造にすぎなかったことを思い知らせるものだった。

夜が明けて間もない、7月のある晴れた朝だった。私はジンギス汗と彼の若い妻に付き添って、ソムのナーダムへ馬ででかけた。

彼の本当の名前はツァンバといたが、私は彼のことを、ジンギス汗とちょっと怖い名前前で呼んでいた。けれども、私がツァンバにこのような渾名をつけていることは誰にも話したことがなかった⁽³⁸⁾。

モンゴル語原文

Арван долоон нас ч дээ. Хөөрхий зайлуул. Би тэгэхэд өөрийг эр хүнд тооцож явжээ. Гэтэл тэр зун ёстой шалчгар эр болохоо мэдэсэн юм. Долдгаар сарын нэгэн өдөр би нутгийнхаа Чингис хаан болоод түүний залуу гэргий хамт сумынхаа наадамд очихоор эртлэн морлоо. Тэр Чингис хаан гэдэг маань ердөө л шар Цамба юм шүү дээ. Би түүнд ийм догшин сүртэй хоч өгсөн боловч хүнд хэлдэггүй байлаа.⁽³⁹⁾

不思議なことに英文より日本語の訳文に3人称の人称代名詞が多用されている。これは日本語の翻訳文体が非西欧の文学へも適応されるという特徴を如実に示している。英語にくらべると、統語的にははるかに日本語に近いモンゴル文を日本語にする場合にも、翻訳としては、現されていない主語も明確にしなければならないのである。

さて、モンゴル文のテキストである。下線を付したところが、通常、тэрという語とその変化形で示されている。тэрは1997年版のBawdenの蒙英辞典にはhe, she, it, thatと定義されている⁽⁴⁰⁾。しかし、1999年に北京で出た新しい蒙漢詞典は、①に那 那个をあげ、多くの用例を示した後、②に他、她、它をあげ、その後、Тэр ирсэн үү? 他来了吗?の例文を示している⁽⁴¹⁾。この例文を見ると、英語三人称人稱代名詞とパラレルな語彙と思われるかもしれないが、1993年出版の新英蒙辞典 she の項目を見ると、She will make you a fine boy. という英文にЭнэ хүүхэн чамд сайхан хүү төрүүлж өгнө дөө.と「彼女」を「この女性」と言い換えたモンゴル文を与えている⁽⁴²⁾。現代中国においても他、她は同じ発音であるが、漢字で書いた文章語としては弁別し得る。モンゴル語では、書いても、発音しても、性別を区別できないのでコンテキストのないところでは主語を弁別できない。つまり、тэрは彼、彼女という働きのできない単語なのであり、下線部も、実は「その」という指示語としての機能しか果たしていないことが分かる。

1930年に書かれたモンゴル文学史上名高い短編小説「旧き子」を見ると、主人公ホーチンフーを人称代名詞で示した個所は全く存在しない⁽⁴³⁾。1950年代、社会主義リアリズムというラベルのもとでロシア文字を使用して生み出された作品群、例えば、II. ダムディンスレンの「ブフ・ゴンボ」にも三人称の人称代名詞は見当たらない⁽⁴⁴⁾。90年代に至るまで、英米の文学に翻訳においてさえ、彼、彼女の意味でТЭРを主語として使う用例を見つけることは難しい。

翻訳文体が日常レベルの言語使用に染みこんだ日本人からすると、三人称人称代名詞がなく、動詞の屈折変化もないのに、三人称の動作主体をどのように表現するのか、不思議に思われるかもしれない。それには、新蒙漢詞典にとられた以下の例文で説明することができるだろう。

Дүүтээс нь захиа ирүүлэв. 他的弟弟寄信来了

このньについて、モンゴル語の国語辞典というべきツェベルの辞書は見だし語として登録していない⁽⁴⁵⁾。同じくそれを親辞書とする小澤重男の『現代モンゴル語辞典』も見だし語としていないが⁽⁴⁶⁾、イギリス人ボーデンの辞書には a possessive form of an obsolete third person pronoun と説明し、その用法の1. に acts as a subject indicator をあげ、яваа нь үзэгдэнэ という例文に he could be seen going along という英訳を付している。このタイプの固有名詞を主語に出さず、三人称の動作主体を明示する文章は30年代の散文作品にも多く見かけられる。日本語においても類似の構文は可能である。

実際のところ、モンゴルにおいて、三人称人称代名詞というものが西洋の「文学」におけるような役割を果たしてはいない。その役割は、むしろ〈私〉によって担われていることが多い。

前掲の例は、文学史の時代区分として、一般に「現代」文学と呼びうる時代、1960年代のC. エルデネ (1929—2000) の作品〈Хулан бид хоёр〉の一部である。日本語翻訳者が、直訳すれば、「ホランと僕の二人」となる題を「ホランとわたし」としていることは興味深い。

この〈私〉による語りは、日本の私小説の〈私〉が、西洋小説の三人称人称代名詞から産まれたものであることと見事に対応する。柳父章は、西洋小説の「彼」や「彼女」にとりつかれていた田山花袋が「彼」に自分を託して〈私〉を創造したことを看破したが⁽⁴⁷⁾、モンゴルでも、この〈私〉による語りの方はД. ナツァクトルジによって、ド

イツ語を通しての西洋文学の模倣によって、1930年に始められたものなのである⁽⁴⁸⁾。

ナツァクドルジの実験は地下水脈として、エルデネら「雪解け」以降の世代に受け継がれた。エルデネはナツァクドルジの生み出した「彼」としての〈私〉という語りの方法でチェーホフ的世界を描こうとしたのである。ロシア語訳のモンゴル短編小説集の序文でヤツコフスカヤらロシア人研究者はエルデネを絶賛した⁽⁴⁹⁾。そうした作品を得たとき、モンゴル文学は「世界文学」の一員となったとモンゴル人たちは確信したのである。

「世界文学」の一員になるということは「国民文学」を確立するという意味でもある。1930年代のインターナショナリズムの信奉者たちが抱いた「世界文学」への夢は、1960年代になってナショナリズムの拠り所となっていく。イギリスにおけるディケンズやロシアのプーシキンが必要になってくる。かくて、1960年代、1930年代に書かれたII. ナツァクドルジの未発表、未完成のものを含む諸作品が、国民文学の聖典となって祭り上げられていくのである⁽⁵⁰⁾。

おわりに

翻訳家としての村上春樹によれば、「すぐれた翻訳にいちばん必要とされるものはおそらく語学力だけれど、それに劣らず——とりわけフィクションの場合——必要なものは個人的な偏見に満ちた愛」である。残念ながら、モンゴルの「文学」について、偏見に満ちた愛を注いだ者は少なく、つねに面白くない「文学」というレッテルを貼られてきた。

その原因のひとつは、「文学」概念の受容にあたって、『日本文学史』が定義した「実用と快楽とを兼ねるを目的」という「快楽」の視点が抜け落ちていたからであり、商品としての「文学」のための市場が長らく存在しなかったためでもある。

村上文学のブームは韓国・中国をはじめ、アジアを席捲している。それはまた、村上のモンゴルに対するオリエンタリズムも同時にアジアの人々の中に刷りこまれていくことを意味している⁽⁵¹⁾。

援助の名の下にもたらされる「よりよい市場経済化」によってモンゴルの生活世界は植民地化していく。カロンカとロシア語風によばれていたものが、ガス・ステーションと呼ばれ、ミニバンに乗ったモンゴル人が携帯電話を片手にドライブスルーのハンバ

ガーをほうばり、電子ブック版『羊をめぐる冒険』のページをめくり、日本の観光牧場の羊もモンゴルの羊も等しく羊であると感じる日がやってきても驚くにはあたらない。かつて、モンゴルとはハイブリッドな集団として、ユーラシアに世界最初のグローバルな空間を作りあげた人々の末裔なのだ。

グローバル化は必ずしも一貫した原理によるものではない。様々なものが絡みあう矛盾に満ちた過程である。多くの人々が指摘するように、そこでは空間に関する議論が重要な意味をもっている。世界中のものやひとが瞬時に流動化する。ディアスポラとか、ノマドとかいう概念が登場するのは当然のことだろう。しかし、ディアスポラもノマドも故郷を持たない人々ではないのである。むしろ、遊牧民は常に故郷を想う人々である。

三人称人称代名詞主語による世界認識は、西洋の自然科学の世界認識と繋がっており、「近代」を支えている。そこから生まれる「文学」が人間と環境、あるいは個人と個人が切り離された存在としてひたすら消費するシステムを支えるエクリチュールであるとすれば、モンゴルの文学者たちが**ардач чанар**（民衆性、**ард**は本来、牧民一般を指し、近代市民性というより、牧民性とでも呼ぶべきかもしれない）の名のもとに、愚直なほどに真剣に目指した牧民大衆に幸福をもたらす「文学」とは別のものだと言わざるを得ない⁽⁵²⁾。

グローバル化する「近代」によってもたらされたモンゴルの「文学」は、ローカルな「文学」として産まれてきた。そして、グローバル化する「近代」がモンゴルに貫徹するとき、そのローカルな「文学」は遊牧民とともに消えてしまう運命なのかもしれない。しかし、もし、三人称人称代名詞の不在のローカルな「文学」が「想像の共同体」の維持のためでなく、真にグローバルな空間に生きる誰にでも**ууга**を見出し得るなら、モンゴルの文学は literature への異議申立ての**ууга зохиол**となるだろう。

そのためには、モンゴル文学はポストモダンという名の異郷ではなく、遊牧民の揺籃たる故郷ノタックの**уран зохиол**を目指すべきなのかもしれない。

注

- (1) イルメラ・日地谷＝キルシュネライト「村上春樹をめぐる冒険」(『世界』第683号、2001年1月号) 199頁。
- (2) ベネディクト・アンダーソン 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体』(NTT出版、1997年) 76頁。
- (3) 村上春樹「翻訳することと、翻訳されること」芳賀徹編『翻訳と日本文化』(山川出版社、2000年) 114頁。
- (4) T. イーグルトン 大橋洋一訳『文学とは何か』(岩波書店、1985年) 24頁。
- (5) M. ゴーリキイ 松本忠司編訳『ゴーリキイ文芸書簡Ⅱ』(光和堂、1973年) 202-204頁。
- (6) БНМАУ Шинжлэх ухааны ахадэмийн хэл зохиолын хүрээлэн, *Монголын орчин үеийн уран зохиолын товч түүх* (УБ 1968) 等参照。等参照。
- (7) 田中克彦『草原の革命家たち モンゴル独立への道』(中央公論社、1973年) 134頁。民主化後の増補版も、この記述の変化はない。
- (8) Монголын зохиолчдын эвлэл, *Монголын Уран Зохиолын Дээжис 17 Цаасан Шуугуу-1* (УБ. 1996) , тал 73-86.
- (9) カルパナ・サヘーニー 袴田茂樹監修 松井秀和訳『ロシアのオリエンタリズム 民族迫害の思想と歴史』(柏書房、2000年) 279頁。
- (10) 『世界文学大事典』(集英社、1997年) にはムスタイ・カリムの名もバシキールの文学も登録されていない。彼らの立場は、インターネット上の TATAR-BASHIKIR REPORT などで知ることができる。ロシア文学との距離については、阿部軍治『ソ連邦崩壊と文学 ロシア文学の興隆と低迷』(彩流社、1998年) 118頁。
- (11) 民族出版社『蒙文分類辞典』(北京、1978年)。初版は1956年、1926年版は北京蒙文書社発行。
- (12) 田村実造 今西春秋 佐藤長共編『五體清文鑑訳解』上下(京都大学文学部内陸アジア研究所、1968年)。
- (13) 代表的なものとして、Д.Цэдэв, *Монгол яруу найргийн уламжлал шинэчлэл* (УБ 1974) .
- (14) 陸軍省編『蒙古語大辞書』(下)、和蒙の部(1933年)。陸軍省編纂のこの辞書は、軍事的な価値に主眼があるためか語彙に偏りがあることは否めない。尚、石田喜与司、ア・ベ・ヒオーニン『最新標音蒙露日大辞典』(南満州鉄道株式会社調査部、1941年)は、ᠮᠤᠩᠭᠣᠯ ᠶᠢᠷᠠᠭᠤに「芸術作品、美文学」の訳語を与え、その生格を「文芸の」としている。

- (15) Ц.Цэдэндамба, *МОНГОЛ ОРОС АНГЛИ ТОЛЬ* (УБ 1986).
- (16) Ц.Дамдинсүрэн А. Лувсандэндэв, *ОРОС-МОНОГОЛ ТОЛЬ* (УБ 1982).
- (17) С.Нямсүрэн, *АНГЛИ МОНГОЛ ТОВЧ ТОЛЬ* (УБ 1968).
- (18) А.П. Дамба-ринчинэ Г.С. Мупкин, *ОРОС МОНГОЛ ТОЛЬ* (Москва1960).
- (19) А. Лувсандэндэв, *МОНГОЛ ОРОС ТОЛЬ* (Москва 1957).
- (20) Mathew Haltod, *MONGOL-ENGLISH PRACTICAL DICTIONARY with ENGLISH WORD REFERENCE LIST for THE EVANGELICAL ALLIANCE MISSION 1949-1953*. 1994年に UMI BOOKS ON DEMAND からリプリント版が出ている。この辞書は小澤重男「モンゴル語の辞書」(『世界の辞書』研究社1992年 所収)等の辞書紹介にとりあげられることのないものであるが、編纂の目的から考えても、語彙資料として貴重なものである。
- (21) 内蒙古教育出版社編纂部『蒙汉词典(試用版)』(呼和浩特、1975年)。
- (22) К.М. Черемцов, *БУРЯД-ОРОД СЛОВАРЬ* (Москва 1973).
- (23) МУНИН БЕМБЕ, *ХАЛЬМГ-ОРС ТОЛЬ* (Москва 1977).
- (24) С.Н.ОНЕНКО, *НАНАЙ-ЛОЧА ХЭСЭНКУНИ* (Москва 1980).
- (25) 赤石洋通「ボヤンネメフ——嵐の中の帆船」(『モンゴル研究』No 2、1976年)。
- (26) "Шинэ үеийн уран зохиол," *С.Буяннэмэх Түүвэр зохиол* (УБ 1968).
- この著作がなされた時、縦のウイグル式モンゴル文字で書かれていた。Монголын зохиолчдын эвлэл, *Монголын Уран Зохиолын Дээжис 23* はボヤンネメフの作品集だが、何故か文学理論部分は削除されている。
- (27) "Утга зохиолын үүд", *Хэл Зохиол Судлал Х боть 1-17 дэвтэр 1975*. この著作は縦文字で公開されたことはない。
- (28) Peter B.Golden, *The King's Dictionary The Rasûlid Hexaglot* (Leiden;Boston;Köln 2000), p.267.
- (29) 日本文学の強い影響のもとに、現代内モンゴル文学に大きな役割を果たしたサイチンガが1939年に加わったブヘヒシゲの蒙文学会の名称はこの伝統的なこの訳語によっている。サイチンガについてはバイカル「サイチンガの人と作品」(『東洋大学大学院紀要』34—35号、1996-1999年)を参照。尚、内モンゴルの近代語彙の形成過程については、フフバートルの博士論文「漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成～中国領内のモンゴル語定期刊行物発達史に沿って～」(1998年)がある。
- (30) Д. Галбаатар, *Уран зохиолын үндсэн ойлголт нэр томъёны хураангуй тайлбар толь*, (УБ 1993) .

- (31) Ш. Гаадамба, *Утга зохиолын онолын үндэс* (УБ 1988).
- (32) 日本の事情については鈴木貞美『日本の「文学」概念』(作品社、1998年) 参照。
- (33) 藤井省三『中国文学のこの百年』(新潮選書、1991年) 12-13頁。
- (34) 吉川幸次郎『中国文学入門』(講談社学術文庫、1976年) 81頁。
- (35) 海野未来雄「モダニズム文学の隆盛と大衆文学」『アジア理解講座「モンゴル文学を味わう」報告書』(国際交流基金アジアセンター、1999年) 等を参照。
- (36) ロラン・バルト 渡辺淳 沢村昂一訳『零度のエクリチュール』(みすず書房、1971年) 36頁。
- (37) Kulan のタイトルで Henry G. Schwarz *Mongolian Short Stories* (Bellingham 1974) に収められている。このアンソロジーはモンゴル発行の英文雑誌 *Mongolia* に掲載された英語翻訳小説を集めて、アメリカ人の立場で英語を手直したものである。
- (38) 松田忠徳訳「ホランとわたし」、松田忠徳・蓮見治雄 荒井信一編訳『モンゴル短編集 帽子を被った狼』(恒文社、1984年) 所収。
- (39) С.Эрдэнэ, Хулан бид хоёр, 1960. *Монголын Уран Зохиолын Дээжис* 31 (УБ 1997) に収められたものからとった。尚、エルデネには同名の作品が他にもある。
- (40) Bawden C.R., *Mongolian-English Dictionary* (London 1997).
- (41) 新蒙漢詞編典編委会『新蒙漢詞典』(北京、1999年)。
- (42) D. Altangerel, *A New English-Mongolian Dictionary* (Ulaanbaatar 1993).
- (43) *Дашдоржийн Нацагдорж Бүрэн Түүвэр* (УБ 1996), тал 220—222. 原文同様、拙訳「旧き子」(『近代化と文学』(アルド書店、1987年) 所収) にも、モンゴル人研究者フフバートルによる日本語訳(『モンゴル語基礎文法』たおフォーラム、1993年) 所収)、モンゴル人留学生オルトナストによる翻訳習作(『世界のわかものよ』27 (大阪外国語大学、1998年) 所収) にも三人称人称代名詞はでてこない。
- (44) Ц.Дамдинсүрэн, Бух Гомбо, 1953, *Монголын Уран Зохиолын Дээжис* 26 (УБ 1997). この作品の日本語試訳としては、田渕人司「種牛ゴンボ」(『世界のわかものよ』21 (大阪外国語大学、1993年)) がある。
- (45) Я.Цэвэл, *Монгол хэлний товч тайлбар толь* (УБ 1966).
- (46) 小澤重男編著『現代モンゴル語辞典』(大学書林、1983年)。
- (47) 柳父 章『翻訳とはなにか 日本語と翻訳文化』(法政大学出版局、1976年) 185—200頁、『翻訳語を読む』(丸山学芸図書、1998年) 13-17頁。
- (48) 拙著『近代化と文学 モンゴル近代文学史を考える』(アルド書店、1987年) 104-110頁。

- (49) К. Яцковская, "От составителя", *Современная монгольская новелла* (Москва 1974).
- (50) 拙論「D. ナツアクドルジの評価をめぐって」(『清泉女学院短期大学研究紀要』第17号、1998年) 参照。
- (51) 村上春樹のモンゴルに関するオリエンタリズムについては、拙論「村上春樹とモンゴル もうひとつのオリエンタリズム」(『モンゴル研究』No.17、1999年) を参照。
- (52) ардач чанар については、拙論「夢のゴビ バヴォーギーン・ルハグヴァスレンと今日のモンゴル文学」(『グリオ』Vol.8、平凡社、1994年) を参照。